

漢字と情報

No. 14
2007・2



京都大学人文科学研究所 Documentation and Information Center for Chinese Studies (DICCS)
附属漢字情報研究センター Institute for Research in Humanities, Kyoto University



- 壺を祀る村から
- 新城新蔵博士の迷信研究
- 進化する「全国漢籍データベース」
- 人文研のアーカイブス(14)『漢書零片』

壺を祀る村から

小南一郎

2005年の11月末に、台湾・台南市の成功大学に招かれて、中国神話をめぐる講義を行なった。講義の翌日には、台南近辺で行きたいところがあれば、どこでも案内してくださるということで、躊躇なく、シラヤ（西拉雅）族の居住地を訪問したいをお願いをした。シラヤ族のことは、国分直一『壺を祀る村—台湾民俗誌』法政大学出版局、を読んで、以前から興味を持っていたからである。成功大学の胡紅波教授が、みずから車を運転して、現地を案内してくださった。

台湾の原住民は、山地に住む高山族（古い言い方では生番）と平地に住む平埔族（熟番）とに大別される。シラヤ族は平埔族の一部分であり、元来は台湾南部地域に広く居住していたが、現在では、特に漢化が進んで、みずからをシラヤ（シラヤとは、かれらの言葉で“人”を意味する）とする意識も薄れている。そうしたシラヤ族の文化を伝える場所が、現在、台南の近辺の五つの地域に遺っているが、その内の二つ、頭社大内郷と東河村吉貝要とを訪ねることができたのである。

前述のようにシラヤ族は、漢化が進んで、元来の言語も失ってしまっている。秋の祭礼の中で歌われている伝統的な歌詞は、かれら自身にもその意味が解らなくなっているが、言語学者たちがその語彙の比較から南島語族に属する言葉であると推測しているのだという。このように、シラヤ族の人々は、民族としてのアイデンティティをほとんど喪失しているのであるが、かれらが行なっている儀礼の中に、古い文化伝統を今も探ることができる。ある民族が、みずからの言葉を失ったあとにも、部族の古い文化伝統が、儀礼の中に傳承されていることを、とりわけ興味深く思う。

シラヤの古い文化伝統として、女系社会であること、缺齒やお齒黒の風習があることなどが挙げ

られているが、なによりも特徴的であるのは、壺を祀る儀礼が守り伝えられていることであろう。頭社村でも東河村でも、部落共同の祭礼場所である祠堂（公廨）の中心には、水が入った壺が据えられていた。頭社村では、壺の背後の壁に雷法に関わる符が貼られており、道教からの影響が顕著ではあるが、祭祀の中心は壺であり、壺の背後の左右に立てられた柱（將軍柱）には、祭祀の際に頭に着ける花輪と豚の頭蓋骨とがいくつも懸けられていた（図1）。東河村の場合、特に興味深かったのが、阿立（日）母を祀る中心祠堂の周囲に、いくつもの小祠堂があって、小規模なかたちで壺が祭られており、さらにその小祠堂から派生するようにして、孫祠堂が置かれ、そこでも壺が祀られていたことである（図2）。

これらの祠堂では、壺がその中心に据えられ、祭祀の対象となっているのではあるが、その壺自体に神聖性があるわけではない。祭礼に先立ち、シャマン的な人物（厓嬢）が壺に対してシアン（向）と呼ばれる儀礼を施す。その儀礼を通じて、祖先の霊が壺に宿り、壺が祭祀の対象へと変化するのである。その祖霊は、東河村での説明によれば、台湾海峡の方から来るとのことであったが、



図1 頭社村大内郷公廨



それが、単に祖霊が海から来ることだけを意味するのか、あるいは台湾海峡を越えて、大陸の方から来ることを意味し、民族の遷徙の迹を反映するところがあるのかは尋ねそこねた。

このように、壺に宿った祖霊が祭祀されるのであって、壺自体には大きな意味はないとされる。祠堂の中心に据えられているのは、茶色の釉薬がかかった陶器が多く、それにアヤメのような植物の葉が挿入されているのであるが、その側には、様々な形態の壺が配されおり、水の入ったペットボトルや、日本のトックリなども、祭壇の上に陳べられていた。ただ、壺自体が神聖化される傾向も見えるようで、日本のオシラさまがオセンタクとよばれる着物を何重にも着ているのと同様に、赤い布が何重にも巻きつけられた壺もあった。

ちなみに、我々のような外部の者が見ることができるのは、部落を単位とする、公廨に並べられた壺に対する祭祀であり、それとは別に、家を単



図2 吉貝要の小公廨と孫公廨（手前） 小公廨と孫公廨との間をかけ渡されているのは、厄嬢が用いる杖

位とする壺の祭祀がある。そこでは、壺は女性によって管理され、女性によって受け継がれているのだという。女系的なシラヤの文化の特質が、壺の祭祀の中にも遺っているのである。

これらの壺に祖霊が憑依させ、祖霊がやどった壺を中心に据えて、大きな祭礼が行なわれるのは秋の季節である。頭社村では旧暦の十月十五日に、東河村では九月五日に、年に一度の大祭が行なわれる。頭社村の例で言えば、その日の夜には、まず犠牲の猪が殺される。その豚の頭蓋骨が、祠堂の中で、中心になる壺の後ろの將軍柱にぶら下げられているのである。おそらく、より古い段階では、野生の鹿が祖霊に奉げられていたのであろう。その夜の行事の中心は、祠堂の前の広場で行なわれる、盆踊りのような踊りであって、人々は、牽曲と呼ばれる伝承歌謡を歌いながら、ゆっくり回りつつ踊る。手を交互につなぎながら踊る輪の中心には、壺が据えられるのである。現在では、白い衣服を付けた少女たちが夜っぴいて踊るのであるが、むかしは、男女が手をつないで踊っていたのだともされる。

わたしは、以前に「壺型の宇宙」東方学報六十一冊、と題する論文を書き、中国大陆における、古代から現在に到る、壺をめぐる様々な民俗伝承を分析し、その背後にある宗教観念を検討したことがある。そこでの議論は、主に文献と考古学の報告とを資料にして行なった。今回は、幸いにも、現在も実修されている、具体的な細節を具えた、壺をめぐる儀礼の一端を垣間見ることができた。こうした個別的な儀礼の持つ意味が、壺をめぐる信仰伝承の背後にあったであろうと論文の中で推測した、基本観念によって整合的に説明できるのかどうか、いささか不安である。伝承的な文化現象を単に記述するだけに止まらず、そこから民俗伝承の法則的な核を抽出するためには、視点をさらに広く、深くするための努力を重ねなければならないとの思いを懷きつつ、夕暮れのせまころ、壺を祀る村々を離れたのであった。

（人文科学研究所名誉教授）

新城新蔵博士の迷信研究 —『大唐陰陽書』購入余話

武田時昌

前号で解題した『大唐陰陽書』には、初頁に京都帝国大学図書館の蔵書印が押してあり、欄外に当時の古書目録と思われる切り抜きが貼り付けてある。それらを手がかりに本書がセンター書庫にもたらされた経緯を調べると、『大唐陰陽書』を所持した賀茂保憲達に比肩する近代の偉大な天文暦学者に出くわす。

附属図書館の旧分類図書カードによれば、1921(大正10)年9月26日に購入、「地宇物(地球物理・宇宙物理教室図書室)」所蔵とある。さらに「鹿田静七」と購入先を附記する。古書目録は大阪船場の有名な古書肆、鹿田松雲堂のものであった。目録には「大唐陰陽曆下卷 開元天衍曆註奥嘉祥元年賀茂保憲云々又醍醐寺云々とあり大形極古足利初頃か 一冊代貳拾圓」と記されている。

図書カードには、昭和32(1957)年1月7日廃棄とある。はっきりした経緯はわからないが、それが人文研の科学史研究室で保管されていたらしく、昭和60(1985)年1月9日の日付で正式にセンターに移管手続きがなされ、再登録された。

ところで、大正10年と言えば、理学部物理学教室内に開設されていた宇宙物理学学科が正式に独立したばかりである。宇宙物理学学科の主任教授は新城新蔵博士、そして学生には荒木俊馬博士がいた(3年後に助教授)。その後、能田忠亮、藪内清両博士を初めとする東洋天文暦学者が雲集し、その新城スクールの伝統が東方文化研究所の天文暦算研究室(現科学史研究室)にそのまま受け継がれたことは、改めて説明するまでもないだろう。

新城新蔵博士の関係資料は、国立国会図書館の新城文庫の他に、京大宇宙物理学教室に荒木家に保管されていた新城博士の研究資料がある(<http://www.kusastro.kyoto-u.ac.jp/library/shinjo/>

[sbunko.html](http://www.kusastro.kyoto-u.ac.jp/library/shinjo/))。「新城文庫 @ 京大」と命名されたその資料に『大唐陰陽書』の購入に関わる情報がないだろうかと、助手の富田良雄氏の許可を得て整理中の段ボールを調査したところ、いくつかの興味深い資料が見つかったので、以下で紹介したい。

ノート類の中には、大正11年末、13年3月末日、15年末に至るまでの「東洋古代の天文学に関する材料の蒐集及整理」と題する三つ報告書の草稿がある(資料番号SB1550~1552)。それは民間の学術奨励団体であった東照宮三百年祭記念会の理事長成田勝郎宛になっており、そこからもらった助成金の中間報告書であると思われる。差出人は、内藤虎次郎博士との連署である。

第1報告書には5つの研究計画を挙げる。

- (1)春秋の曆を中心としての古代曆法の変遷
- (2)史記天官書、淮南子天文訓及時則訓、呂氏月令を中心として、戦国秦漢に於ける一般天文学の発達
- (3)石氏星経を中心として漢魏六朝に於ける天文学の発達
- (4)天文星占に関する迷信を中心として中古に於ける天文学の発達
- (5)印度の天文曆法

三つの報告書はそれぞれの進捗状況を述べたものである。(1)について、第3報告書に太古から漢初までをまとめた「東洋天文学史大綱」と題する論文を書き上げたとある。『内藤博士還暦祝賀支那学論叢』(192(大正15)年5月刊)953-977頁に掲載されたものである。この論文はすぐに中国訳され、「科学雑誌」11-6に発表された。翌年4月に南開大学教授だった錢宝琮氏博士は書評文をしたためて学生に授けたが、ちょうど天津に渡航していた新城博士はそれを寄贈され、さらに同年10月には「支那学」4-3に倉石武四郎訳で掲載されるに至った。それは、『東洋天文学史研究』(1928(昭和3)年9月刊)に再録される以前の話であり、驚くべきスピードの日中研究交流であった。

(2)については、第1報告書に「文学士倉石武四郎氏に依嘱し、是等の三書の校勘に着手」し、第

2報告書に「(伝来の考証及び校勘の) 大体仕事を終り、其の一部はすでに学会に発表」、第3報告書に「倉石博士が上古より近代に至るまでの天文学に関する文献目録をほぼ完全に完成させたので、そのカードを然るべき時機に印刷したい」と記す。

(3)については、石氏星経の復原を試み、「伊澤学士に依頼し目下計算研究中」とあり(第2報告書)、「『開元占経』の坊間流布本(引用者注: 恒徳堂刊本)と比較研究」した結果、最初の推定である前漢末頃よりも古く「確かに戦国時代のもので」「世界最古の星表」とする(第3報告書)。後に、この考察を継いで上田穰博士が『石氏星経の研究』を書き上げ、さらに藪内清博士が別の観点から年代考証した。その一連の研究は、この新城プロジェクトから発進しているのである。

興味深いのは、その資料として前田侯爵家所蔵の『天文要録』『天地瑞祥志』を謄写していることである。別の資料中に両書の内容を書き出したメモもある(SB234)。『天地瑞祥志』『天文要録』の抄本は、現センターにもあり、『大唐陰陽書』とともに貴重な資料になっている。図書台帳によれば、東方文化研究所が創設された直後の1931(昭和6)年に発注しているが、新城先生の助言によるものにちがいない。

残りの2項目について、第1報告書で(4)には「古暦本に見えたる暦註の変遷によりて晋隋から唐宋に至る時代の天文星占の一端を察することが出来るであろう」とし、古暦本の謄写に着手したとあり、(5)には「今日までは二三の書物を購入しただけ」とある。第2報告書には研究は進んでいないが、「多少集めた材料によりて」近々研究の歩を進めたいと述べる。古暦本とあり、『大唐陰陽書』の書名は出てこないが、この研究活動の一環として本書が購入されたと思われる。

大正13年(1924)9月に京大心理学教室読書会にて行われた講演「迷信の研究」の手控え原稿が残っている(SB300-303)。その中の便箋一枚(301)に参考書を列記するが、そこに『大唐陰陽書』が挙がっている。興味深い文献リストなので、

全文を掲載する。

洪範。春秋繁露。漢書五行志。白虎通。五行大義。周易折中。三易由来記。周易原論〔渡邊千春, 1921〕。易の原理と占筮〔遠藤隆吉, 1919〕。占の話(伊藤〔徳之助, 1921〕) 作易年代考(支那学〔1-2・3, 1920〕所載本田〔成之〕氏論文) 易疑〔内藤湖南, 「支那学」3-7掲載, 1923〕 陰陽五要奇書。協紀弁方書。道德数情〔清沈重華輯〕。方則指要〔黒田昌輯, 田宮悠述〕。方鑑秘傳集(松浦〔琴鶴〕)。方鑑大成(尾島〔碩聞〕)。大唐陰陽書。宿曜経。看命一掌金。三命消息賦。百忌曆。曆林問答集。拾芥抄。簠簋。循環曆〔小泉松卓〕。頒曆略注〔賀茂保救〕。事林廣記〔縦線で上3字抹消〕。和漢三才図絵。黄帝宅経。陰陽二宅全書〔清姚廷璽輯〕。家相秘傳集〔松浦琴鶴〕。家相新編〔尾島碩聞〕。古事類苑方伎部。大雜書。三世相類。古暦本。

井上円了 妖怪学講義。中村〔古峽〕 一邪教と迷信〔迷信と邪教 1922〕。鑿術と迷信〔小川剣三郎, 1913〕。神佛の御利益調べ〔西川光二郎, 1919〕。

※ () は新城原注, [] は武田補注。

易学, 術数学に加えて陰陽道の基礎文献を列挙し、さらに明治以降の研究書、啓蒙書や「支那学」に掲載された本田成之、内藤湖南両博士の最新論文に至るまで、広範囲に網羅している。

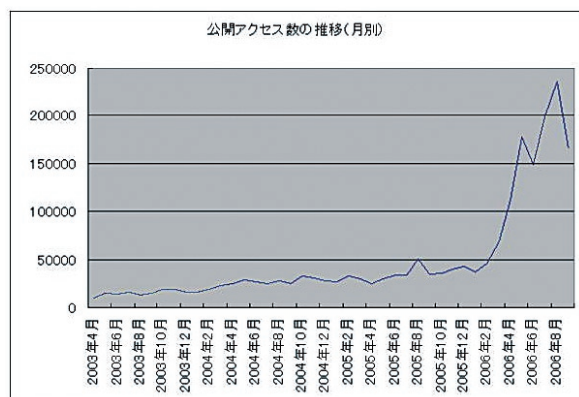
縦線で削除したと思われる『事林広記』についても、2枚の読書メモ(SB1306, 和刻本の巻7, 時占門からの抜粋)が残っている。

新城先生は暦注や陰陽五行説を迷信として厳しく批判したが、その文献をまったく拒絶したのではないことがわかる。いやそれどころか、専門的に研究したと言ってもいいほどに読破しているのである。戦後になって、陰陽道史料の研究は中村璋八、村山修一諸氏によって盛んになったが、中国術数書の本格的な研究はまだない。そこで、『五行大義』『事林広記』を取り上げ、共同研究班で会読しているところであるが、新城先生がすでにそれらの読解に着手されていたとはまったく想定外のことであった。(センター教授)

進化する 「全国漢籍データベース」

全国漢籍データベース作成委員会

全国の主要な大学図書館・公共図書館が所蔵する漢籍の書誌情報をすべて網羅する「総合漢籍目録」を、伝統的な四部分類に則してウェブ上に構築する——この遠大な目的を掲げて平成13年度（2001）に始まった「全国漢籍データベース」の作成事業は、第1期5ヶ年の事業期間において、全国35機関の所蔵漢籍、約56万レコードのデータを構築し、これをウェブ上に公開した。幸い、各界からは極めて有用な学術ツールとして高い評価を受け、公開アクセス数も年を追って増加し続けている（下表参照）。



平成18年度（2006）から始まった第2期5ヶ年の事業計画では、「新・全国漢籍データベース」と題して第一期の事業内容を継承するとともに、新たな試みとして、

- 1) 『四庫全書総目提要』全文テキスト・データの作成と公開。
 - 2) 「巻頭画像」（第一巻第一葉）、および「蔵書印」などの画像データの一層の充実。
 - 3) 国内外関係機関との連携の強化。
- 等を推進している。

このデータベースの利用対象者は、人文科学の

分野において漢籍を資料とするすべての研究者であるが、具体的な利用内容としては、データベースに記載された書誌情報に基づいて各所蔵機関に閲覧を申し込み、当該漢籍について直接研究を行うほか、本データベースが提供する多様な検索項目を駆使することによって、漢籍の出版、流通、所蔵等に関する歴史的・計量的な研究を行うことも可能である。また本データベースの利用により、各機関の所蔵する漢籍の比較調査や、未調査資料の整理・公開が一層促進されることが期待できる。

その一つ具体例として、京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センターでは、旧東方文化学院京都研究所の収蔵漢籍（『東方文化学院京都研究所漢籍目録』1938年版）を対象に、教員有志による所蔵漢籍の逐冊調査を行い、全国漢籍データベースの記載情報に関する確認・増補の作業を進めている。これは全国漢籍データベースに記載された書誌情報の典拠を示し、その正確性を確保すると同時に、蔵書印、題字、序跋などに関する追加情報をも提供するもので、各書誌データにリンクする形で既にその成果の一部が公開されている。将来、他機関の所蔵する漢籍との比較調査を進めるうえで、この「典拠情報」が基礎資料として活用されることを期待したい。

「新・全国漢籍データベース」の作成事業は、平成18年度日本学術振興会科学研究費補助金（研究成果公開促進費・データベース）の交付を受けて順調に進んでいる（課題番号：188034）。

今後とも、本データベースの作成事業に一層の御理解・御協力を賜りたい。

（文責：矢木毅 人文科学研究所助教授）

* 全国漢籍データベースは、下記のウェブ・サイトで公開しています。

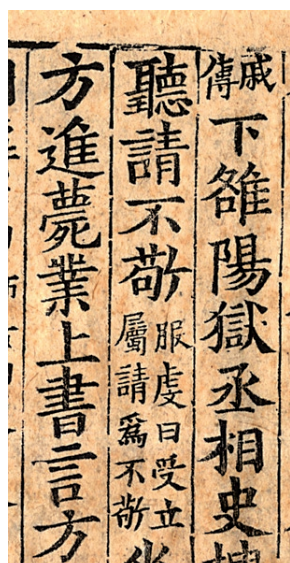
<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kanseki/>

* 本年度の全国漢籍データベース協議会総会は、2007年3月9日（金）に予定しています。当日のプログラムは第8頁参照。協議会公式ホームページ（http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kanseki_kyogikai/）にも掲載中です。

人文研のアーカイブス (14)
漢書零片 存列傳第三十
漢班固撰 唐顔師古注

宋刊本

梶浦 晋



この欄で何度かのべたのではあるが、本所は漢籍（ことに唐本）を多く収蔵することで知られているが、所蔵典籍の多くは清代の刊本で、漢籍の収蔵に富む他の同規模の機関にくらべ、宋元明の古刊本や古鈔本は必ずしも豊富とは言えない。

所蔵の宋元版は60数点をかぞえるが、その多くは松本文庫中に存する大藏經の零本である。子部釋家類を除く宋元版は『附釋音春秋左傳註疏』、『監本附音春秋公羊註疏』、『監本附音春秋穀梁傳註疏』（『漢字と情報』No.5で紹介）、『後漢書』、『國朝諸臣奏議』（『漢字と情報』No.2で紹介）など数点にとどまる。ここにあげた書は、数少ない宋版のひとつである。

この書は、見開き一葉のみの零葉（列傳第三十の第十九葉）で、下方が一部欠け、裏打補修がほどこされている。大きさは32.8×47.0、（半葉匡廓内22.7×17.3）。左右双辺、有界、半葉九行十六字（注文双行）の堂々たる宋の大字本である。刻工は、「孫昇」。「敬」字に闕筆がみとめられる。版心は細黒口で、「前漢傳三十 十九 孫昇」とある。昭和十年に彙文堂より5円で購入している。

宋版の『漢書』は、尾崎康氏『正史宋元版の研究』（汲古書院 1989年）には、北宋末南宋初刊本、南宋後半期福唐郡庠刊本、宋紹興中湖北提舉茶塩司刊本、南宋前期兩淮江東轉運司刊本、南宋前期建刊十二行本、宋慶元黃善夫・劉元起刊本、宋嘉定蔡琪一經堂刊本、宋嘉定十七年白鷺洲書院刊本の八種があげられているが、本所蔵本は兩淮江東轉運司の刊刻にかかる三史本（『史記』『漢書』『後漢書』）のうちのひとつである。

国内では静嘉堂文庫、天理図書館に同版の所在が確認されており、海外では北京大学図書館や国家図書館（台北）などにもある。伝本はいずれも宋元の遞修本で、元末から明初にかけての印刷にかかると思われる。完本の伝存は確認されていない。本所所蔵のこの零葉は明初の印刷と推定されるが、宋代の原刻葉部分であることは貴重である。

（センター助手）

HP・TOPICS

前回に引き続き、人文学研究部のHPを紹介します。今回は「藤井正人 Online 研究室」。藤井正人教授は、インド学／ヴェーダ研究の専門家ですが、HPのネーミングは「藤井正人研究室の機能の一部をオンライン化したもの」と説明されています。文字ベースのとてもシンプルなデザインですが、コンテンツは多彩で、随所に創意工夫と個性がちりばめられ、隅のほうにこっそりトラブルへの気配りもなされています。ギャラリーであるインド写真集は、現存ヴェーダ伝承の不思議世界が垣間見られます。インド学研究は最もハイテク化が進んでいる文系領域ですので、Linux マシンやLaTeX を自在に使いこなしたい人にとって、「ツール」「コンピュータ覚書」にはとても役立つ情報が満載です。

藤井正人Online研究室

開設日 2005年10月26日 最新更新日 2007年2月3日 現在 2007年2月9日10時32分

このホームページは京都大学人文科学研究所 藤井正人研究室の機能の一部をオンライン化したものです。基本的には研究室の情報ベースとして運用していますが、学生、研究者、一般の方々にもご利用いただけます。

[活動概要](#) | [授業](#) | [共同研究「王権と儀礼」](#) | [研究室カレンダー](#) / [今月](#) | [リンク集](#)

[図書](#) | [資料](#) | [情報ボックス](#) | [インド写真集](#) | [ツール](#) | [コンピュータ覚書](#)

[プロジェクト用ページ](#) (要パスワード) | [内部用ページ](#) (要パスワード)

藤井 正人(ふじい まさと) 京都大学人文科学研究所 教授(インド学／ヴェーダ研究) Ph.D. (ヘルシンキ大学)
研究者番号 50183926

〒606-8501 京都市左京区吉田牛ノ宮町 京都大学人文科学研究所
E-mail: [ここをクリック](#)

人文科学研究所(人文研/じんぶん)の地図は[こちら](#)

◆お知らせ

[これまでのお知らせ](#)

<共同研究>

人文科学研究所 共同研究「王権と儀礼」(班長 藤井正人)

【次回】2007年2月16日(金) 第25回(2006年度第12回)研究会(報告会11)担当
横地 優子、午後3時から6時 人文研本館401号室

【DICCS NEWS】

- 第42回全国文献・情報センター長会議が2007年1月26日(金)に神戸大学経済経営研究所新刊2階会議室にて行われた。文部科学省からは研究振興局情報課学術基盤整備室の及川義博大学図書館係長が参加した。本年度より東京大学法学部政治学研究科外国法文献センターが、附属諸センターの統廃合に伴い五センターの枠組を離れることになった。そこで、残る四センターを中心とする今後の組織的なあり方を討議し、また統一テーマによる人文社会科学学術情報セミナーの開催等について話し合った。
- 全国漢籍データベース協議会第7回総会のプログラムは以下の通りである。

日時：2007年3月9日(金) 14時～16時

会場：学術総合センター12階1208・1210会議室

(東京都千代田区一ツ橋2-1-2)

演題：

今年度の事業報告 井波陵一(センター教授)

古籍数字図書館的構建

史睿(中国国家図書館善本部)

横浜ユーラシア文化館所蔵の研究者旧蔵漢籍の組織化における意義と諸問題

— 故江上波夫氏旧蔵漢籍コレクションを例に

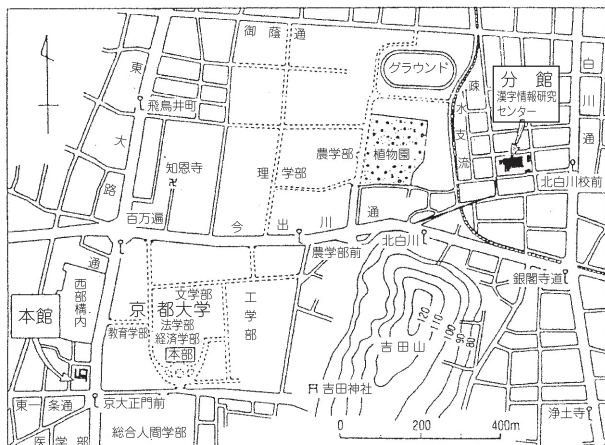
江場山起(早稲田大学博士後期課程)

全国漢籍データベースの典拠情報について

永田知之(センター助手)

質疑応答

司会：矢木毅(センター助教授)



発行日 2007年2月28日

発行所 京都大学人文科学研究所附属
漢字情報研究センター

〒606-8265 京都市左京区北白川東小倉町47

電話 075-753-6997 FAX 075-753-6999

<http://www.kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>